

# TOKYO PAPER

トーキョーペーパー

for Culture

フォーカルチャー

こんにちは。『TOKYO PAPER for Culture』は、東京文化発信プロジェクト（ブンプロ）が発行する、東京の文化を研究するためのフリーペーパーです。「文化は人の営みそのもの」という想いを携えながら、わたしたち編集部員は、“文化研究員”として、その研究成果を紙面上で発表しています。2020年東京オリンピック・パラリンピック開催決定という、半世紀ぶりの祝祭に向けて走り出した東京。『TOKYO PAPER for Culture』は、この壮大なテーマに対しても、地道な研究を重ねていきたいと思います！

Hello. This is the “TOKYO PAPER for Culture”, a free paper from the Tokyo Culture Creation Project that explores the culture of this vibrant city. Holding true to the belief that “culture is the work of humanity,” we editors work as “cultural researchers” to deliver the fruits of our cultural investigations in a handy, readable format. The “TOKYO PAPER for Culture” will also focus on the 2020 Tokyo Olympics and Paralympics—a historic undertaking already beginning to take shape. As Tokyo prepares for its first Olympic festivities in approximately 50 years, we'll delve into all the cultural dimensions that the upcoming celebration is now unlocking.

第三号／003

7年後の東京、わたしを見つめながら

ひびのこづえ（コスチューム・アーティスト）× 近藤良平（ダンサー／振付家）× 原田郁子（音楽家）

研究テーマ③：墨東を歩こう

東向島～曳舟～押上周辺のあれこれ

東京文化の新しい幕開け

2020年東京五輪開催決定



2020年、東京オリンピック・パラリンピック開催が決定。東京の文化を研究している私たちにとっては、格好の研究材料です。客員研究員の3人の目に映る、オリンピック模様。座談会はこの話題から始まりました。

**近藤良平 (以下、近藤)：**オリンピックのことは、2年前から現実的に意識し始めていましたね。それは国体 (第68回国民体育大会) の開会式式典演技の演出を担当することになったから。9月7日 (日本時間8日) に開催地が決定して、9月28日からは国体が始まります。だから、もしオリンピックが東京に決まったら、(国体の) 式典にはその演出を入れなくてははいけないし、これはちょっと大変だなと思っていた。実際決まって、やっぱり世の中は大騒ぎしましたね。その分、僕は冷静に受け止めながら、式典の準備をしました。でも、少しずつ気持ちも変わってきて。国体の参加選手には15歳以上18歳未満の少年枠があるんですけど、2020年を想像したときに、まさに彼らが現実的にオリンピックのトップバッターの世代になる。僕が40代から50代になると訳が違うから、これはとてつもないことだなんて。オリンピックが決定したことで、国体も特別なムードに包まれましたし、今は東京に決まって良かったなあと、素直に嬉しいです。

**ひびのこづえ (以下、ひびの)：**私の場合、オリンピックというと、前回の東京オリンピックのことを思い出します。開催された直後に、家族で愛知から新宿に引っ越してきたんですよ。学校の同級生から「空に浮かんた五輪マークを見

たよ」「アベベ (アベベ・ビキラ) の応援に行ったよ」とか聞いて、オリンピックは現実だったってそこで初めて実感して。

**近藤：**面白い。それはかなり昔の話ですね。

**ひびの：**そう、かなり昔 (笑)。だからその当時、私は日本にいながらオリンピックを生で観ることができなかったんですよ。でも今、再び7年後の東京でオリンピックが行われようとしている。すごいことだなんて。でも、一方でこれを言ったら怒られてしまいそうですが、私はイスタンブールで開催されるオリンピックも観てみたかった。東京は都市としての快適さや豊かさに対するアピールが強かったでしょう。

**近藤：**確かに他の候補地に比べて、東京は経済的に余裕があるかもしれない。

**ひびの：**そう、余裕があると思います。だからたとえば、東京が抱える東日本大震災のこと、原発のことを本気で向き合いながら、もっと大々的に“東北を応援します”という気持ちに立てると良いなって。

**近藤：**経済発展のためとか、お金のためだけの動きにならないよう、そういう余裕が東京にはちょっとありますよね。オリンピックはスポーツの祭典だけれど、そこに付随する文化的なものの見直しや発展も、この機会にできることがあるはず。それは震災のことも含めて。

**ひびの：**私もそう思います。実際にはこうして東京に決まったのだから、私自身もそういう視点を持って、自分にできることを考えて、行動していきたい。

**原田郁子 (以下、原田)：**あの、オリンピックが決まった時、

ちょうどクラムボンのツアー真ただ中で、私、7年後のこととか、全然考えすぎてました (笑)。

**近藤：**それは逆に面白い! (笑)。

**ひびの：** (笑)。

**原田：**うーん、でも今、お二人が話しているのを聞いていて、自分の人生のなかに、大きな地震とオリンピックがあったとしたら、それはすごいことかもしれないなって。

**近藤：**きっと今から50年後くらいの未来では、2020年は大きな地震を経験して、オリンピックに向けて次第に立ち直っていった日本、みたいな図になるのかな。

**原田：**例えば戦前、戦中、戦後のことを祖父母に聞いてみたくなるように、「あの頃ってどんな感じだったの?」って、いつか子供たちに聞かれるのかな。そのくらいの時代を生きているのかもしれないですね。

**近藤：**震災からオリンピックまで、およそ10年。

**原田：**10年、恐らくすごい振幅だと思います。良いことも悪いこともたくさん見るんだろうなって。でも想像を超えていて、想像がつかないというか。楽しみでもあります。

**近藤：**そうやって考えていくと、今できることを小さな単位でも地道にやっていく方が大切だし、その方が楽しそうだね。

何事も、顔が見える小さな単位で。

**ひびの：**小さな単位の可能性は、昔に比べてすごく広がってきていますよね。今年の夏、森山開次さん、川瀬浩介さんと一緒に取り組んでいる『LIVE BONE』という公演を、東京のスパイラルホールと広島県立美術館で行ったんですね。それで広島県立美術館でやるときに、通常の展示ホールで公演ができるのかなって当たり前のように思っていたら、実際は地下のロビーでお願いしたいという依頼だったんです。それを聞いて、正直戸惑いました。照明、衣装、オブジェをすべてスパイラルホールと同じもので準備して、同じ条件のなかでやりたかったから。だから本当にロビーでできるものなのかと不安でいっぱい。でもやることが決まって行ってみると、運営してくれた方もお客さんもすごく気持ちがあたたかくて、公演は大成功。いい経験でした。もう時代は公演を行うのに、必ずしも劇場やホールで行う必要はなくなってきていると。

**近藤：**僕もダンスのワークショップをいろんな場所でたくさんやっていますが、やっぱり一回のイベントで終わらずに

## Seven years from now: Tokyo and me

# 7年後の東京、わたしを見つめながら

3回目となる巻頭の東京文化座談会。今回お招きした“客員研究員”は、ひびのこづえさん (コスチューム・アーティスト)、近藤良平さん (ダンサー／振付家)、原田郁子さん (音楽家)。池袋〜目白〜雑司が谷を散策しながら、どこまでものびのびと文化について議論してくれました。

To lead off our third issue, we assembled a team of three “guest researchers” :costume artist Kozue Hibino, dancer and choreographer Ryohei Kondo, and musician Ikuko Harada. While walking around Ikebukuro, Mejiro and Zoshigaya, they had an enlightening, unfettered discussion of culture.



① フランク・ロイド・ライト設計、国の重要文化財でもある自由学園明日館 (豊島区池袋) を訪れる。この日はちょうど結婚式が行われていた。中庭でお三方は、その式の記念撮影会に遭遇。その様子を眺めながら、ゆっくりとした時間が流れる。



継続していくときというのは、現地に必ずひとり、強烈に面白くて熱い人がいるんですよ。ワークショップを絶対にやりたい!って、めちゃくちゃ強い想いを持って。そういう人がひとりいると、そこからいろんなことが広がっていく。

**ひびの:** 個人の想いが大きな何かを動かしていく時代ですね。——原田さんが活動しているクラムボンでは、お客さんから小さなライブ会場を募って、実際にそこで演奏するというツアーを行っていますよね。

**原田:** うんと、そうですね。デビュー当時は、大きな都市の大きな会場で、たくさんのスタッフと飛行機や新幹線を使って巡るっていうツアーもやっていたんですね。でも例えば仙台の会場に来てくれるお客さんたちは、電車をいくつも乗り継いで来てくれていたり、泊まりがけで来てくれていたんだってわかってきて。だったら、私たちがその町までライブしに行くにはどうしたらいいだろうって。あとは、福岡の酒蔵でライブしたことで「ライブハウスじゃない場所の音の良さ、独特さ」に気がついた。それでライブ中に「クラムボンを観るならどこがいいですか?」って地元のお客さんから面白い場所を募集するようになって。それが「ドコガイデスカツアー」の発想です。電気さえあれば、音が鳴らせるサウンドシステムと楽器、メンバー、マネージャー、PA、スタッフの最少人数で、ワゴン車1台で全国をまわりながら、洞窟、合掌造り、芝居小屋とか、いろんな場所でライブしています。

**ひびの:** すごい! それは北海道から沖縄まで?

**原田:** はい。フェリーで海を渡って。「大変ですよ」って言われるんですけど、「大変」って思えば大変なんでしょうけど、それ以上の充実というか。「誰もやっていないことをやっている」という意味では、開拓民のような気持ちです。

**近藤:** 原田さんが経験しているそのローカルな、小さな単位の楽しみ方を、東京でももっとしていけたらいいよね。

**ひびの:** 例えば東京を4つくらいに分けて考えてみても良いかもしれない。ツアーをするにも、地区を分けて回るとかね。

**原田:** 本当に駅ごとに、北口か南口かでも街の雰囲気が違うし、「東京」って広いです。

**ひびの:** そうそう。それに東京って文化に恵まれているように見えるんだけど、実は孤独なところがあると思うんです。まず幅広い年齢層を迎え入れる場所がありませんよね。私は昨年から今年にかけて、雑司が谷で、『虫を作るワークショップ』<sup>(※1)</sup> というものをやっていたんですね。舞台衣装などに使った布の端切れを使って、参加者は自分がイメー

**Ryohei Kondo (Kondo):** The Olympics started seeming like a realistic possibility to me about two years ago, when the organizers of the National Sports Festival of Japan asked me to coordinate the opening ceremonies for the 68th tournament, scheduled for 2013. I don't think I'll ever forget that surge of excitement that swept across Japan when they announced that Tokyo was going to host the 2020 festivities. It really hit home for me when I realized that the athletes in the 15-17 age group at the 2013 National Sports Festival could very well be Japan's premiere athletes when the Olympics make their way here in 2020. You know, over the next seven years, all I'm going to be doing is transitioning from my forties to my fifties—but some of these young competitors are going to be making an unbelievable leap from adolescence to the global stage.

**Kozue Hibino (Hibino):** For me, hearing the word “Olympics” will always make me think of the 1964 Tokyo Olympics. My family moved from Aichi to Shinjuku right after the Games ended, and I remember my new classmates talking about how they'd seen the Olympic rings high in the sky, how they'd heard the cheers for marathon runner Abebe Bikila in person. That was the first time the Olympics had ever seemed real. I never got to actually see the Olympics for myself back in 1964, but the festivities are right on our doorstep again. It's amazing that they'll be right here in Tokyo in just seven short years. I know I'll probably get blasted for saying this, but I would've loved to see the Olympics in Istanbul, too. The Tokyo delegation must have done a great job of showing how comfortable and prosperous the city is. That's why I hope the Olympics give us a chance to really confront the Great East Japan Earthquake & Tsunami issues, concentrate on the whole nuclear power problem, and make real contributions to the recovery efforts in Tohoku.

**Kondo:** The Olympics may technically be a celebration of sport, but I think the 2020 Games can open up some avenues for reexamining and enhancing the deeper cultural pieces that come along with the festivities. The Great East Japan Earthquake is part of that, I think.

**Ikuko Harada (Harada):** Wow—I hadn't even started thinking about the Olympics until this very moment.

**Kondo:** That's pretty impressive, actually! (Laughs)

**Harada:** I'll have experienced both the Great East Japan Earthquake and the Tokyo Olympics in one lifetime.

**Kondo:** From the disaster to the Olympics in 10 years—amazing, isn't it?

**Harada:** The pendulum's swinging big and wide,

Kozue Hibino

Ryohei Kondo

Ikuko Harada

I think. By the time the Olympics start, we'll have run the gamut of experience from extremely trying, difficult times to the opposite extreme of joy and excitement. There are going to be swings over the next seven years, too. I just wonder how I'll perceive it all—how I'll respond to all the changes.

**Kondo:** If you look at it that way, I think that taking a small-scale, low-key approach to whatever we do is going to be the best way of going forward. It's more fun to keep things grounded and community-focused, anyway.

**Hibino:** You can do so much more with small-scale performances than you used to be able to. This summer, I worked with Kaiji Moriyama and Kohske Kawase on their “LIVE BONE” shows at Tokyo Spiral Hall and the Hiroshima Prefectural Art Museum. When we were getting ready for the Hiroshima performance, I just assumed that we'd be doing the show in the kind of exhibition hall that we normally performed in. Then I found out that we were supposed to use the underground lobby. When I first heard that, I seriously didn't know what to do. I didn't think there was any way to do it in a little lobby. But when we actually went through with the performance, all the organizers and audience members were so receptive and enthusiastic—and the show was a smash hit. It was an incredible experience, really. Now I know that you don't always need a standard theater or hall space to give a good performance.

**Kondo:** In my experience giving dance workshops in

↓ 子授け、安産祈願の神社として参詣人を集めてきた鬼子母神堂（豊島区雑司が谷）へ。





ジしたオリジナルの虫のブローチを作り上げるというワークショップなんですけど、毎月、赤ちゃん連れのお母さんから、子供から、おばあちゃんまで、いろんな世代の人が集まってくれたんです。そこでね、みんなお友達になって新しいコミュニティが生まれているのを見て、すごくいいなって思って。だからこの東京でも小さな単位で動くと、実はホットなことが出来る。そう確信して、東京に愛着心が持てました。——集って同じ時間を共有する喜びってありますね。孤独感も和らぐ。オリンピックもダンスもライブも虫のワークショップも、そういう視点で見ると、つながりが見えてきます。

**近藤**：でもそこで大切なのは、ちょっとした自主性を持つことなんです。やらされているのではなく、やりたい人がやる。

**ひびの**：原田さんが以前、両国国技館でライブをされた時に、白いTシャツを着てくることをドレスコードにされた話を聞きました。みんなクラムボンの同じTシャツではなく、白のTシャツというところがすごくいいなって。それこそちょっとした自主性があるでしょう。

**原田**：2011年の国技館ですね。実際、どのくらい着てきてくれるのか、着てこなかった人たちは疎外感を持たないだろうとか、本番がはじまるまでわからなかったんですけど。震災があって、なんとかツアーをまわって、ライブができるっていうこと、人が集まるってことが、それだけで尊いことだと。それで、しばらく歌えなかった『波よせて』という曲を演ったんですけど。360度、真っ白白いお客さんたちと、ステージの私たちと、全体が照明で青く染まったんですね。その瞬間を思い出すと今でも涙が出そうになるんですけど、ほんとに息をのむような、海の底にいるような光景でした。

**ひびの**：人の心と身体の動きに、服の存在が作用していますね。やっぱり私は服を作る人間なので、感動してしまいます。

**原田**：嬉しいです。あの時期、ライブから受け取ったものは大きかった。「私たちには、音楽がある」ってバカみたいに腹をくくれた。ダンスがうまい人だけの踊りじゃなくて、歌がうまい人だけの歌じゃなくて。ただ一緒に音のなかで身体を揺らしたり、声を出したり、笑ったりできる。個々が集

まったときのグルーヴみたいなものを、感じたように思います。

**近藤**：それは全く同感。舞台上では観る側と演者が分かれるけど、例えば僕が盆踊りをしでかす<sup>(※2)</sup>ってというのは、もうすでに観る側と演者の距離感なんてなくて、純粹に「僕も踊るけどあなたも踊るよね？」っていうことだけ。だから一歩動き出せば、個々の踊りは僕には止められないんですよ。踊りは劇場から飛び出していくし、美術品ですらみんな美術館から外に出る時代。

**ひびの**：そうそう。今までは大都市集中で、何かを観るためには大きな街に行かなければならなかったけど、今は各々の場所でしか作れない、または観られない時代になってきた。

**原田**：そうですね。移動しながら、発信したり受信したり。

**近藤**：面白いのは、『ルンバ』ってあるでしょう。

**ひびの**：ダンスのルンバではなく？ えっ掃除機？（笑）。

**近藤**：『ルンバ』って勝手に部屋を動き回って掃除してくれるでしょう。でもね、そんな『ルンバ』もドアが空いていると勝手に部屋を出ていっちゃうらしい（笑）。今はルンバも外に出て、旅する時代。だから外に出よう、動いていこう。一同笑

※1 プンブロが取り組んでいる事業「東京アートポイント計画」プロジェクトのひとつでもある。

※2 近藤良平・コンドルズが、2009年より池袋の街を舞台に行っている『にゅ〜盆踊り』大会を指す。

## Ⅰ 研究結果のまとめ

プンブロが取り組む事業に『東京アートポイント計画』がある。互いの顔が見える地域を舞台に、そこに住む人や集う人とアーティストが協力しながら各々の地域文化を育んでいこうという仕組みだ。オリンピックのような大イベントに対峙するとき、個人の想いや、小さな関係性から生まれる活動はなかなか見えにくいかもしれない。しかし、どんなに大きな催しも、個人の想いの積み重ねでできていることを忘れてはいけない。小さな楽しみを凝縮していく7年間で、オリンピックをあなたのものにする。



### 原田郁子 Ikuko Harada

1975年福岡生まれ。1995年「クラムボン」を結成し、歌と鍵盤を担当。並行してソロ活動も行う。2010年からは、多目的複合スペース「キチム」（吉祥寺）を企画運営している。最新作に、原田郁子 & ウィスット・ボンニミット『Baan』がある。

Born in Fukuoka in 1975, Ikuko Harada formed “Clammbon” in 1995 as the group’s keyboardist and singer. Besides playing with the band, Harada has also performed extensively as a solo artist and run “Kichimu”, a multipurpose space in Kichijoji, since 2010. Her latest release is *Baan*, a collaborative effort with Wisut Ponnimit.

### 近藤良平 Ryohei Kondo

1968年東京生まれ。ペルー、チリ、アルゼンチン育ち。学ランを着用する男性だけのダンス集団コンドルズ主宰。北米、中南米をはじめ海外公演ツアーも行う。また、テレビやミュージシャンのPVなどで振付家として活動する傍ら、横浜国立大学等の非常勤講師も務める。

Born in Tokyo in 1968, As the leader of Condors, an all-male dance company Ryohei Kondo has toured North, Central, and South America as well as many other locations throughout the world. When he’s not dancing or choreographing routines for TV shows and music videos, Kondo also teaches classes at Yokohama National University.

### ひびのこづえ Kozue Hibino

1958年静岡生まれ。コスチューム・アーティストとして、広告、演劇、ダンス、バレエ、映画、テレビなど、その発表の場は、多岐に渡る。NHK Eテレ「にほんごであそぼ」衣装セットを担当中。展覧会多数。1997年作家名を内藤こづえより改める。

Born in Shizuoka in 1958, costume artist Kozue Hibino has an impressive repertoire that extends into areas as diverse as advertising, theatrical productions, dance, ballet, film, and TV. In charge of “Fun with Japanese” costume set being broadcast in NHK. In 1997, she changed her artist name from Kozue Naito to Kozue Hibino.



3号目ともなると、そろそろ定着した感があるでしょうか？ 客員研究員の証、それはこのロゼットです！

various places, one of the things I’ve learned through doing multi-event series is that wherever you go, there’s always one participant who’s just so into the whole idea, someone who’s got that fire in his eyes. You don’t forget those kinds of people.

-- Ikuko, you and Clammbon do tours where you play at venues suggested by fans.

**Harada**: We pile the band, our PA, our manager, our instruments, and all our other equipment into a van and head out to places our fans have told us about. That’s the basic concept. As long as we’ve got a power source, we can kind of turn any venue into our own unique space for a night. A brewery, a steep-thatched-roof house, an important cultural property, you name it—we’ve played at some pretty off-the-wall places.

**Kondo**: It would be so cool if we could get more of that local, small-scale feel in Tokyo.

**Harada**: That could work. I think every single station in Tokyo—maybe even every single station exit—has its own special vibe.

**Hibino**: Tokyo seems like it’s full of so much culture all the time, but I think there are actually quite a few places that are pretty isolated. There aren’t many areas that offer something to people of all ages, for example. Last year, I did a “Workshop to create insects” in Zoshigaya. The thing that really amazed me was that every month, we had participants from so many different generations. Watching them make friends with each other and form their own little community, I was amazed. This is what it’s all about, I thought. That’s why I think Tokyo can really be a vibrant, exciting scene if you focus on smaller-scale projects.

----There’s a unique joy that comes from being part of a tight community, a feeling that can even break down those walls of isolation.

**Kondo**: I agree completely. The important thing is initiative, though—the only way to really cultivate that community-driven spirit is if the people involved are doing it because they really want to.

**Hibino**: Ikuko, I heard that you made white T-shirts the dress code for one of your lives at the Ryogoku Kokugikan. I thought it was so cool that you had your fans wear plain white shirts instead of Clammbon shirts. That takes some initiative, if you ask me!

**Harada**: It is Kokugikan in 2011. That was the year of the big earthquake and tsunami, of course, so we were so aware of how precious it was to be able to go on a tour and play music in front of people. For that live, we decided to play a song called “Nami Yosete” [Surging Waves], which we hadn’t been able to bring ourselves to sing for a while, and there was a moment when the 360-degree view of all those white shirts in the audience, as well as we on the stage, were turned into a sea of glowing blue by the lighting. It was a breathtaking view, and I felt like I was under the sea.

**Hibino**: Clothes have that kind of effect on how people move and feel, I think. As a clothing designer, I’m always impressed to witness that transformative power.

**Harada**: Those that time, received from live was great. The dance, not only of people good at dance, song, not only of people can sing. Everybody can rock themselves, sing and laugh together to the music. We felt a groove produced when individuals got together.

**Kondo**: I’m with you there. When you’re on stage, there’s this sense of separation between the performers and the audience. But when you start getting into things like Bon Odori, there’s none of that distance between the two sides; it’s like, “I’m dancing, get in line behind me!” That kind of closeness, that communal connection, is changing the way art behaves: dance is coming off the stage, and even fine art is escaping the confines of museums.

**Hibino**: Right. You used to have to go to certain cities to see the culture there, but now it’s the opposite; you have to go to a lot of different places to see things that are special to each location. We’ve entered a time full of motion, one where people need to venture out in search of those unique local flavors.

**Harada**: That’s right. While moving, you can receive or outgoing.



# ブンプロ 掲示板

研究所のなかにある、ブンプロ掲示板。  
平成26(2014)年2月、都内で行う、  
ブンプロが主催するプログラム情報です。

Welcome to the Tokyo Culture Creation Project bulletin board,  
the place to find information on all Project-sponsored programs  
going on in Tokyo February 2014.



## 01

### 野田秀樹作の一人芝居 『障子の国のティンカーベル』を ダブルキャストで上演

A One-Woman Show written by Hideki Noda  
"Tinkerbell in Shoji Land"  
Performed with a Double-Cast

©端 裕人



東京芸術劇場が、芸術監督・野田秀樹の優れた戯曲を気鋭の演出家によって紹介するシリーズ第2弾として、『障子の国のティンカーベル』を上演する。2010年に松尾スズキ演出で上演された『農業少女』に続き取り上げる本作は、野田自身が「1981年25歳の正月3日間を返し、殴り書いた」という、秘められた名作戯曲。物語は誰もが馴染み深い童話『ピーター・パン』に登場する妖精ティンカーベルを主人公に、障子の国＝日本にやってきたピーター・パンとの恋について語られていくというもの。女優一人と人形が演じ、歌が挿入されるという、野田作品には珍しい作風であるこの作品を、今回、穂谷友子(2月13日(木)～16日(日))、奥村佳恵(20日(木)～23日(日))のダブルキャストで上演する。演出は『赤鬼 (RED DEMON)』『THE BEE』などに出演、ロンドンの「テアトル・ド・コンプリシテ」設立メンバーであり、野田と親交の深いマルチェロ・マーニ。実は野田自身は演出したことがないという幻の一人芝居。それを異世代女優2人がどう演じ切るのか、体感してみたい。

The Tokyo Metropolitan Theatre presents "Tinkerbell in Shoji Land", the second in a series pairing Artistic Director Hideki Noda's outstanding plays with spirited directors. Following up on "Girl of the Soil", staged under the direction of Suzuki Matsuo in 2010, the current production is a hidden gem; Noda says he dashed it off all at once at the age of 25 during the three-day New Year's holiday in 1981. The main character is the fairy Tinkerbell from the beloved children's story "Peter Pan", who spins a tale of romance with Peter in Shoji Land (Japan). Performed by an actress and a puppet with incorporating songs, the style is unusual for a work by Noda. The piece will be performed by a double cast, with Tomoko Mariya performing from 13-16 February and Kae Okumura from 20-23 February. It will be directed by Marcello Magni, a close friend of Noda's who appeared in both "Red Demon" and "THE BEE" and is a Co-Founder of the Complicite in London. Seeing how two actresses of different generations perform this unique piece, which Noda himself has never directed, promises to be a "can't miss" experience.

会期：平成26(2014)年2月13日(木)～2月23日(日)  
会場：東京芸術劇場 シアターイースト  
作：野田秀樹  
演出：マルチェロ・マーニ  
出演：穂谷友子／奥村佳恵  
パフォーマー：野口卓磨  
料金：3,500円(前売)、4,000円(当日)、6,000円(穂谷友子版＋奥村佳恵版セット券)、1,000円(高校生)、2,500円(25歳以下)、3,000円(65歳以上)  
問い合わせ：0570-010-296(東京芸術劇場ボックスオフィス)  
主催：東京都／東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
東京都／東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

Dates: 2.13 (Thu) – 2.23 (Sun), 2014  
Venue: Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre East)  
Playwright: Hideki Noda  
Director: Marcello Magni  
Actors: Tomoko Mariya/Kae Okumura  
Performer: Takuma Noguchi  
Admission: ¥3,500 (advance), ¥4,000 (at the door), ¥6,000 (set of tickets for Tomoko Mariya and Kae Okumura), ¥1,000 (high school students), ¥2,500 (under 25), ¥3,000 (65 and over)  
Information: 0570-010-296  
(Tokyo Metropolitan Theatre Box Office)

## 02

### 映像とアートの国際フェスティバル 『第6回恵比寿映像祭』開催 総合テーマは、「トゥルー・カラーズ」

An International Festival of Film and Art  
Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2014  
Festival Theme: "True Colors"

展示、上映、ライブ・パフォーマンス、関連イベントなどによって複合的に構成する、映像とアートの国際フェスティバル、恵比寿映像祭。第6回目となる2014年は「トゥルー・カラーズ」をテーマに、グローバル化が進行する現代社会における多様性を映像体験を通じて提示し、そこから示唆される未来の可能性について考察していく。展示プログラムでは、メイン会場である東京都写真美術館のすべての展示室を使用して、世界各国から集まった数多くの作家たちによる映像表現を紹介。そこから浮き彫りになるのは、自然環境や地域的な歴史、伝統、民族などによって培われてきた文化の多様性と豊かさだ。また、上映プログラムでは、アジアからの発信として、現代中国を代表する王兵監督の最新作『収容病棟』が、2014年初夏の劇場公開に先駆けジャパンプレミアとして上映される。

そのほかにも、映像表現における現在の課題や社会的な動きについて議論する「シンポジウム」、国内外のゲストによる「レクチャー」、映像の作り手・受け手・担い手が、カジュアルな雰囲気なか、作家や作品の背景に触れる「ラウンジトーク」など、映像というメディアについてさらに理解を深め発見を促す多彩なプログラムが、複合的に実施される予定だ。

The Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions brings together exhibitions, screenings, live performance and related events in an international festival of film and art. In 2014, under the theme "True Colors", the sixth edition of the event presents opportunities to experience through images the diversity of our ever-globalizing contemporary society while considering the possible futures seen therein. The exhibition program takes over the entire main venue, the Tokyo Metropolitan Museum of Photography, in presenting expressive imagery by numerous artists from around the world. What these works cast into bold relief is the rich diversity of the natural environment and the cultures nurtured through regional history, tradition, and ethnicity. In the tradition of sharing the best of Asia, the screening program includes the Japan premiere of "Til Madness Do Us Part", the latest film by Wang Bing, one of contemporary China's most important directors, in advance of its summer 2014 theatrical release. The festival will also include a symposium where creative filmmakers discuss contemporary issues and social trends; lectures by guests from Japan and overseas; and lounge talks that bring artists, viewers, and others from the field together in a casual atmosphere to talk with artists about their background and their work. Such a varied festival program offers an opportunity to make new discoveries while gaining a better understanding of the media of film.

会期：平成26(2014)年2月7日(金)～2月23日(日) [月曜のぞく15日間]  
10:00～20:00 ※最終日は18:00まで  
会場：東京都写真美術館 全フロア／恵比寿ガーデンプレイスセンター広場ほか  
料金：入場無料 ※定員制の上映プログラム、イベントなどについては有料  
問い合わせ：03-3280-0099(東京都写真美術館)  
主催：東京都／東京都写真美術館・東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)／日本経済新聞社(予定)  
共催：サッポロ不動産開発株式会社

Dates: 2.7 (Fri) – 2.23 (Sun), 2014  
(15 days excluding Mondays)  
10:00 to 20:00 \* except the last day: close at 18:00  
Venue: Tokyo Metropolitan Museum of Photography (all floors), Yebisu Garden Place Central Square, etc.  
Admission: Free (However, a fee will be charged for limited capacity screenings and events.)  
Information: 03-3280-0099  
(Tokyo Metropolitan Museum of Photography)



上／朝海陽子〈ノーザリーウィンド〉2011[参考図版]  
下／王兵〈収容病棟〉(香・仏・日) 2013  
© Wang Bing and Y.Production

### J-WAVE『BUN-PRO TOKYO CREATIVE FILE』 大好評オンエア中。

音楽や映像、そしてパフォーマンスなどのイベントや展覧会に至るまで東京文化発信プロジェクトの最新プログラムを紹介する番組が、現在J-WAVE(81.3 FM)でオンエア中(毎週土曜日11時35分～11時45分)。  
お聴き逃しのないように!

Events, exhibitions, and more featuring everything from music and video to performances Tune in to J-WAVE (81.3 FM) to get all the latest information on Tokyo Culture Creation Project programs.  
So that they will not missed it!

NOW ON AIR

このほかのプログラムや最新情報は、  
東京文化発信プロジェクト  
公式ウェブサイトをはじめ、  
公式facebookやtwitterでご覧ください。

[www.bh-project.jp](http://www.bh-project.jp)

For the latest information on other programs,  
visit the official web site,  
official Facebook page, or Twitter page.

[www.bh-project.jp/en](http://www.bh-project.jp/en)



## Belgium

バルト・カペレ  
ドラマトゥルク  
Bart Capelle / Dramaturge

フリーランスのドラマトゥルクとして、集団創作型の演劇・パフォーマンスを手がける。多数の演出家やカンパニーの作品に関わりながら、芸術学校などにてアドバイスも行う。現在は、外国で展開するプロジェクトにも参加。

墨東エリアには、地域と世界に開かれたアートのスポットがある。

RPSギャラリーは、地域と世界の両方に開かれた場所のように感じた。まさに、文化交流を行うことができる場所。もちろん大きな会場で作品を展示することも重要だが、アートは地域社会に根差したものであるべき。墨東エリアは人々がともに生き、問題を解決するために文化とコラボレーションしている良い例だ。

It seemed that RPS Gallery is open to both the neighborhood and the world. This truly is a place where cultural exchange can happen. Of course it's important to show art works in large venues as well, but art should be something rooted in the local community. The area is a fine example of how culture and collaboration can contribute to the way people live together and find solutions for shared problems.



## Germany

マルクス・ドロス  
ドラマトゥルク  
Marcus Dross / Dramaturge

フランクフルト・ムーゾントウム劇場のドラマトゥルク。クリエイター、プロデューサー、演出家、ドラマトゥルクとして、ダンス、音楽、演劇などの分野で活動。

街を發展させ、保存する過程には様々な力が働くことを確信した。

墨東エリアは多様性に富む地域という印象。何かを發展させまた保存することが、必然的に多様な方向性と強度を力強くビビッドに結びつけていることがよくわかった。向島百花園は庶民の庭園なので、複合的な機能がありそうだ。大変象徴的で、他に類のない場所である。今後も東京で、できるだけ多くのものを見てみたい。

My impression is that the Bokuto area is very diverse. Here it is clear that developing and maintaining something necessarily combines vivid forces of multiple directions and intensities. Mukojima Hyakkaen Gardens is a people's garden, so it seems to have a hybrid function: is very symbolic, and also very unique. In the future I would like to see as many things in Tokyo as possible.



## India

アミテシュ・グローヴァー  
パフォーマンス作家  
Amitesh Grover / Performance Maker

パフォーマンスやパブリック・ゲーム・イベント、インターメディア・インスタレーションを手がける。ジャンルや文化を越えた創作活動を行い、欧州、米国、アジア各地に作品が招聘されている。受賞歴・レジデンシー歴多数。

社会におけるアートの重要性を提起する素晴らしい街。

墨東エリアには、世界中の街づくりのモデルとなりうる素晴らしい地域社会イニシアティブがあると思う。特に印象に残ったのは、アーティストのスタジオやショップで、社会でのアートの重要性を提起している。若くフリンジなパフォーマンス・アーツのコミュニティへの支援と基盤が、今後東京で育つことを願う。

The Bokuto area has excellent local community initiatives which could be models for urban development around the world. I was particularly impressed by the artists' studios and shops, which in my view demonstrate the importance of art in society. It's my hope that support and infrastructures for fringe and young performing arts communities will be nurtured in Tokyo in the future.



## New Zealand

アニヤ・ヘニス  
ライター、キュレーター  
Anya Henis / Writer, Curator

エラム美術学校の修士課程（美術）を修了。現在は同校で教えている。年2回発行の美術雑誌『Magazine』の共同エディター。ニュージーランド内外のギャラリーで作品を発表するとともに、キュレーションも手がける。

地元の人たちが先導を切って、芸術家の誘致に力を注いでいる。

昔の日本と現代の日本との面白い組み合わせであり、大変対照的だった。鳩の街通りでは、人々の暮らしぶりを見ることもできて良かった。地域にアーティストを招き、文化の保存と創造に尽力していること、それらがすべて居住者主導であるところが素晴らしいと思う。

I found it to be an interesting combination of old and modern Japan, with sharp contrasts between the two. I'm glad I had the chance to see people's way of life on the Hatonomachidori. I think it's wonderful that all the efforts to bring artists to the area and the focus on cultural preservation and creation are being led by the residents themselves.



## Indonesia

フェレンシア・フタバラット  
クリエイティブ・エコノミー・コンサルタント  
Felencia Hutabarat  
Consultant for creative economy

2011年まで、オランダの開発援助団体HIVOS東南アジア地域事務所のプログラム・オフィサーを務める。ジャカルタ・ブリティッシュ・カウンシルのクリエイティブ・エコノミーのコンサルタント。

パブリック・スペースとしての庭の存在に、大きな意味を感じた。

東京という都市で、向島百花園のようなパブリック・スペースを持つことは、コミットメント、愛、地域社会への配慮、そして無私無欲の行動全てが欠かせないと感じている。百花園には、きちんと手入れされた他の庭と異なる印象を持った。この地域が發展した歴史的文脈について、より深く知りたいと思う。

I have the feeling that commitment, love, consideration of the local community, and selfless action are all essential factors in having a public space like Mukojima Hyakkaen Gardens in a city like Tokyo. I had the impression that Hyakkaen is somehow different from other, well-tended gardens. I would really like to learn more about the historical context in which the area developed.



## Romania

オアナ・イオニタ  
アートマネージャー  
Oana Ionita / Cultural Manager

ギャラリーの共同経営、ルーマニア現代美術の紹介を手がけるほか、オンライン・アートマガジンを発行。PRやマーケティング等もこなす。ブカレストにオープン予定のポストモダニズム・ミュージアム計画にディレクターとして関わる。

過去を守りながら、未来を見ているその考え方がとても好き！

向島百花園でガーデンハウスに入れたこと、そして美しい景色を目の前に昼食をとったことがとても嬉しかった。案内してくれた向島学会理事長の佐原氏は、とても陽気な方だった。伝統を保存しながらも、それを大変建設的な方法で絶えず問い直している彼の、新しいものと古いものの取合せが私は好きだと感じた。

I was delighted to have a chance to enter the garden house at Mukojima Hyakkaen Gardens and eat lunch facing the beautiful scenery. Mr. Sahara, who guided us, is a very lively person. He preserves tradition, but at the same time he continually questions tradition in a very constructive way. I found that I liked his way of combining the new with the old.



## Thailand

ルッカーナ・クナーウィチャヤーノン  
BACCディレクター  
Luckana Kunavichayanont / Director

2003年までタイのアートセンターで芸術監督として多数の展覧会のキュレーションに携わり、2008年から翌年にかけてバンコク芸術文化センター（BACC）のオープニング展共同キュレーターとして大規模な展覧会を手がけた。

独自の方法で、都市の開発に力を入れていたのが印象的だった。

コミュニティのメンバーが、彼ら全員に最も益するような独自のやり方で、都市開発と「交渉」しようとする努力を目にするのは興味深いものである。それは時間のかかるプロセスであり、関係者全員の多様な理解と共有を必要とする。そのような試みを行うコミュニティのリーダーたちには感銘を受ける。

It is interesting to see the effort of community members to negotiate with urban development in their own way, and in a way that will benefit all of the members most. It is a time-consuming process that requires many types of understanding and sharing on the part of everyone involved. I was impressed by the community leaders.

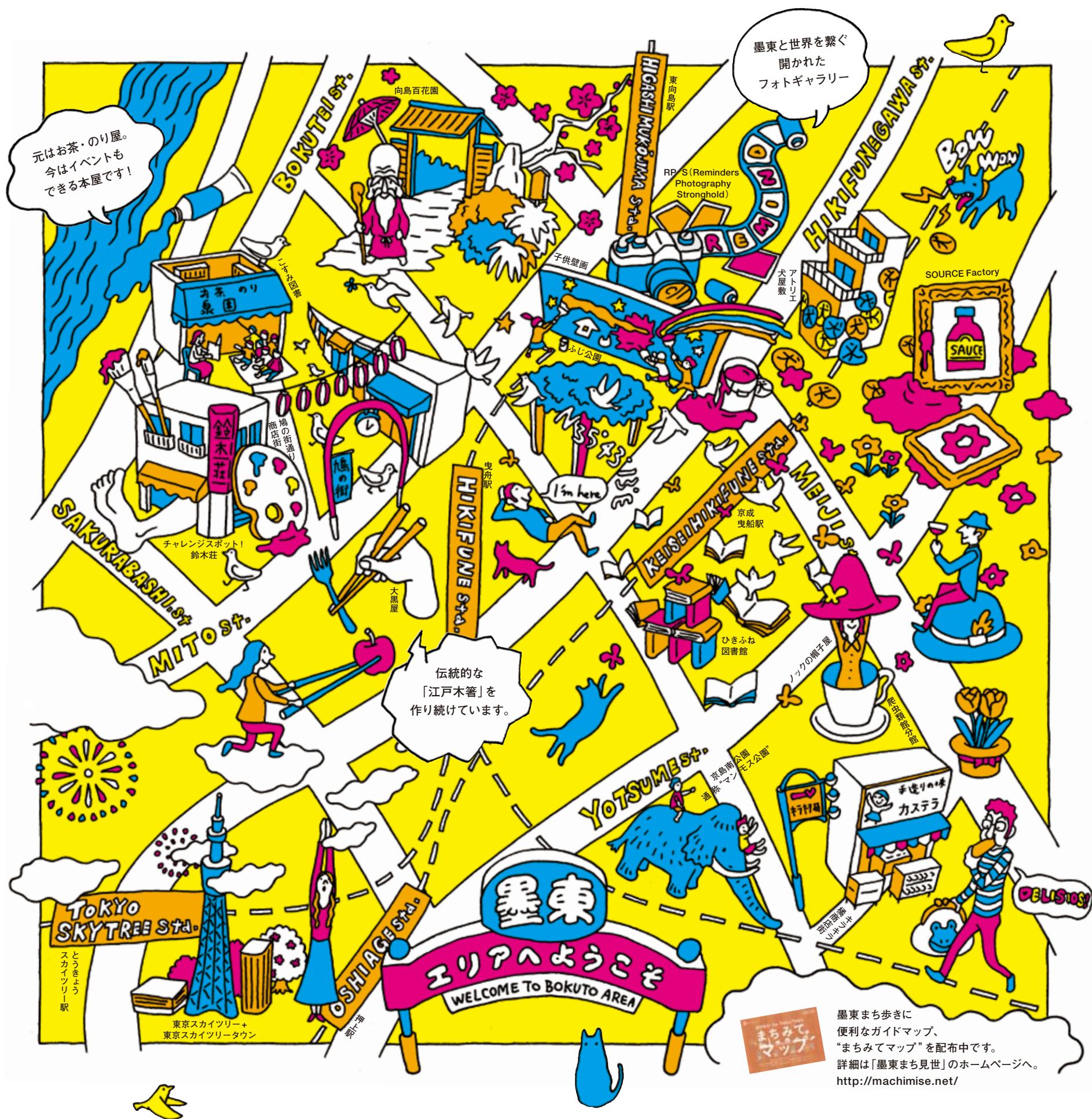
# 東向島～曳舟～押上周辺のあれこれ 墨東を歩こう

「墨東エリア」とは、押上、曳舟、向島など、墨田区の北半分を占める地域の総称。文化財などの史跡に加えて、昔の面影を残す住宅や商店が路地裏に沿って立ち並ぶ、古きと新しきが上手に共存した希有なまちです。中でも注目すべきは、地元の方々がアーティストと一緒にワークショップを行ったり、商店街の空き店舗をアトリエとして利用する若者がまちの外からやってきたりと、アート活動によってまちが盛り上がっていること。近頃は、地域の魅力を発信し、ネットワークを育て、まちの課題をアートで共有するブンプロ事業『墨東まち見世』の活動も手伝って、さらに豊かなコミュニケーションも生まれています。そんな墨東にある日、10か国から、10名の芸術家・ジャーナリストが訪れました。彼らはブンプロ主催のプログラム『国際招聘プログラム』で来日。東京文化のひとつとして、「墨東エリア」を視察してもらったのです。この街は、彼らの目にどう映ったのでしょうか。

"The Bokuto area" is a general term referring to the neighborhoods comprising the northern half of Tokyo's Sumida ward, which include Oshiage, Hikifune, and Mukojima. In addition to historic sites, some of which are cultural assets, Bokuto has back streets lined with houses and stores reminiscent of a past era. It's a unique city area in which the old and the new coexist seamlessly. One day, ten artists and journalists from ten countries visited Bokuto. They came to Japan with the "International Visitors Program" organized by the Tokyo Culture Creation Project, and observed the Bokuto area as an aspect of Tokyo culture. What were their impressions?

Taking a walk through Bokuto





墨東まち歩きに  
便利なガイドマップ、  
“まちみてマップ”を配布中です。  
詳細は「墨東まち見世」のホームページへ。  
<http://machimise.net/>



Philippines / Singapore



マヨ・マーティン  
デビュティ・フィーチャー・エディター  
Mayo Martin / Deputy Features Editor

シンガポール「TODAY」紙のコラムで、舞台芸術や美術などを取り上げる。シンガポールのメディア企業「MediaCorp」の年間最優秀ジャーナリスト。英語で編纂した詩の本「Occupational Hazards」も出版予定。

地域の方々が信頼し合って、  
コミュニティが形成されている。

墨東エリアは、私が東京で見たいと常に思っていた場所だった。なぜなら今まで訪れる場所はすべて都会的で「文化観光地化された」場所ばかりだったからだ。墨東を初めて訪れてみて、「本物」であることとその共同体意識が大好きになった。ひとつの場所ではなく、あちこち歩き回るのは素晴らしい体験だった。

The Bokuto area is a part of Tokyo I always wanted to see, because all of the places I've visited before were urban and "culture touristy." Visiting Bokuto for the first time, I came to love its authenticity and community spirit. It was a great experience to walk around different parts of the area, rather than just one place.



Italy



ロレンツァ・ピニャッティ  
美術史家・現代美術キュレーター  
Lorenza Pignatti  
Art Historian / Curator

2002年よりミラノのNABAで現代美術を教えている。2006年、ベサロ映画祭にてペレ・ボルタベラのレトロスペクティブをキュレーション。その他芸術作品のキュレーション、本の編集も手がける。

大都市のイメージとは違った  
大変興味深いエリアだった！

東京を訪れる前の印象は「整理されたにぎやかな大都市」。3度目の東京訪問となった今回は、墨東エリアの視察を楽しむことができた。この地域のことを知らなかったで、本当に興味深く、驚きに満ちていた。特に向島百花園が、素晴らしいかった。

Before I came to Tokyo, my image of it was "a well-organized, busy big city." This was my third visit to Tokyo, and this time I had the enjoyable experience of seeing the Bokuto area. I didn't know about this area before, so it was really interesting and filled with great surprises. Mukojima Hyakkaen Gardens was especially wonderful.



Croatia



ソニヤ・ソルド  
プログラム・コーディネーター  
Sonja Soldo / Program Coordinator

アートからアクティビズムにまたがって活動するキュレーター・コレクティブ「BLOK」のメンバー。独立系の文化機関とザグレブ市が連携するカルチャーセンターPOGONのプログラム・コーディネーターとして活躍。

地域をあげて、人と文化を繋げる  
活動の軌跡が見られた。

向島百花園と、鳩の街通りが特に印象的だった。まるで別の時空にいるような感じがした。私は以前より伝統建築を体験したいと思っていた。また、どんな風に地域が人々と文化を繋げているかを感じられたのは素晴らしいことだった。どんなメディアでも構わないので、墨東エリアを俯瞰して提示するアートが見てみたい。

Mukojima Hyakkaen Gardens and Hatonomachidori made a particularly strong impression on me. I felt as if I were in a different space-time. I had always wanted to experience traditional architecture. It was also wonderful to get a feeling of how the area connects people with culture. I'd like to see art, in any kind of medium, which shows an overview of the Bokuto area.





Column

Where the master does his work

あのひとの現場

長島 確のアトリエ  
The office of Kaku Nagashima

長島 確／Kaku Nagashima  
日本のドラマトゥルクの草分けとして、コンセプトの立案、上演テキストの編集・構成を扱う。海外戯曲の翻訳ほか、様々な演出家や劇団の作品に参加。東京アートポイント計画では『墨田区／豊島区／三宅島在住アトレウス家』に続き『長島確のつくりかた研究所：だれかのみたゆめ』が進行中。



ドラマトゥルクの仕事は、誰とどういう形で組むかで変化します。相手は演出家やプロデューサー、劇作家など様々ですが、少なくとも「誰かのパートナー」であることは間違いないですね。私が現在行っている仕事は、かなり多岐に渡っていて、海外戯曲の翻訳、作品にまつわる資料や情報の提供、さらに東京アートポイント計画での取り組みなど、一言で括するには難しいものがあります。翻訳を行うときは家に缶詰になって作業をしますが、それ以外のときは新宿・池袋辺りのオフィスピルの共用スペースや、デパートの階段の踊り場など、ちょっとした空間でパソコンを開くことが多いです。何時間も作業をするわけではないので、パソコン1台と膝があれば何とかできます。そこで何をしているかというと、主に関係者間での情報の共有や受け渡し。メールをチェックして、返信、転送といった、比較的スピード感の求められるものがほとんどです。私が街を拠点にしている理由は、固定の職場がないせいもありますが、日々変化する今の空気や環境、社会状況などと一緒に何ができるかを常に考えているから。演劇は外から隔離された箱の中で、必要なものだけ持ち込まれて作られ、かつお客さんも非日常を味わうという位置づけのものが多くに思えます。でも自分たちが生きている社会と地続きなものももっと色々あったらいいなと思うんです。それは古典の翻訳でも同じ。ときには作者の意図や当時の文脈と違って、この文章をどう訳せば今私たちが生きている世界のリアリティとリンクするか。そんなことを考えています。自分の好みや趣味ではなく、その時代の空気を適切に拾いたい。そのために必要なセンサーを常にアップデートしようと、私は今日も街に出かけます。

A dramaturge's work depends a great deal on the people involved in the project and how they work together. If you're a dramaturge, you're always working with some kind of "partner"—it could be a director, a producer, or a playwright, for instance. Right now, I'm kind of stretched in lots of different directions: among other things, I'm translating foreign plays, providing materials and information on various works, and helping out with "Artpoint" Project. My work is so varied that it's hard to sum up what I do in a nice, concise definition. I usually hole up in my house when I'm translating, but I like to head out with my laptop when I've got other stuff to do. As long as there's space to open up my computer, I can pretty much work anywhere—common areas in Shinjuku-area office buildings, department store stairwells, you name it. Most of the time, I'm taking care of time-sensitive things that I need to get finished quickly: checking my e-mail, responding to messages, forwarding things, and so forth, for distribution and sharing of information among the persons involved. I could probably do that kind of stuff at home, too, but I like to work in the city because I always consider what I can do by throwing myself in ever-changing atmosphere, environment, and social conditions around me. I get the feeling that a lot of plays nowadays are crafted by people working in their own little boxes with the bare minimum of tools, secluded from the world in hopes of delivering extraordinary experiences to audiences. I wish the drama world would start embracing the kinds of things plays that make people really engage with the world we live in. The same goes for translation. I'm always thinking about how I can link texts in foreign languages to our own current reality—even if it departs from the original writer's intentions or the context of those days. I want to capture the truth of the times, not just reflect my own preferences and interests. That's why I'm out in the city again today, keeping my receptors up to date and my sensors finely tuned.

Tokyo Creative / Robert Harris

旅

「ブックショップ＆カフェ」  
を歩いて見知らぬ町に着くと、僕はその町のボヘミアンなエリアを探し求め、そのカフェやブックショップへと赴く。そういうところではその町のクリエイティブなエネルギーや文化的指数をいちばん敏感に感じることが出来るし、面白い人間にも出会えるからだ。  
カリフォルニアに留学していた1960年代には、サンフランシスコのステイライツ・ブックストアへ行ってポエトリ・リーディングを初めて経験した。日本に戻って新宿で暮らしていたときは当時流行りの風月堂というカフェによく出入りし、そこでたくさん心の友と巡り会った。  
シドニーで暮らしていたときは自分のブックショップと画廊を経営。店の奥にはテーブルとコヒー・マシーンを置き、みんながコヒーを楽しみながら本を読めるようにした。日曜日にはポエトリ・リーディングを開催し、2階の画廊では個展の他にパフォーマンスや前衛音楽のコンサートなどを主催した。ちょうどシドニーの

トーキーョー  
クリエイティブ



"Bookshop & Cafe"

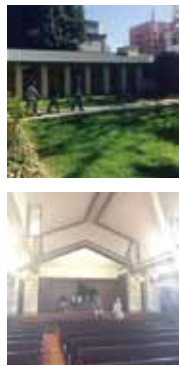
When I'm traveling and arrive in a new city, I always seek out the bohemian part of town and head for the cafes and bookshops there. Those are the places where I can get the best sense of the city's creative energy and cultural character, and meet interesting people. In the 1960s, as a student in California, I went to San Francisco's City Lights Bookstore and experienced a poetry reading for the first time. When I returned to Japan and was living in Shinjuku, I frequented Fugetsudo, a cafe that was really popular at the time. When I lived in Sydney I ran my own bookshop/gallery, where people could drink coffee as they read books in the back of the store. On Sundays I held poetry readings, and in the second-floor gallery there were performances and avant-garde music concerts in addition to solo art exhibitions. This was in the period when Sydney's youth culture and counterculture, art scene and gay culture were expanding rapidly. My shop became a gathering place for artists who were leading those trends. Back in Japan I became a radio DJ and writer, and today I often do lectures, poetry readings and so on in bookshops and cafes in Tokyo. This city has an abundance of spaces that are ideal for events like these. Of course, museums, theaters, festivals and the like are needed in order to make towns and cities cultural, creative places; but I think bookshops and cafes, which tend to be overlooked because of their everyday character, are actually very important parts of a city's creative and artistic life. When I visited the gallery/cafe "About Cafe" in Bangkok's Chinatown, the owner, Noppadon, said, "Even though it doesn't make much money, it's important to have a place like this in the city." I agree. Culture often blooms in unique, independently run spaces, and in many cases it's transmitted from there to the rest of the world.

若者文化やカウンターカルチャー、アート・シーンやゲイカルチャーが急激に花開いている時代だった。僕のショップはそんな流れを担う芸術家やインテリやボヘミアンたちの宿り木のような場所となった。  
日本に帰り、ラジオのDJと作家になった今、僕はよく東京のブックショップやカフェでトークショーや講演やポエトリ・リーディングなどをやるようになったが、この都市はそんなイベントをやるには最適なハコに恵まれている。町を、都市を文化的でクリエイティブな場所にするためにはアトスクールやミュージアムや劇場やフェスティバルといったものは確かに必要だが、庶民的でもあるが故に見落とされがちなブックショップやカフェも、実はその都市の創造性や芸術活動にとっても大切な場所なのだと思う。  
以前、バンコクの中環街で「About Cafe」というギャラリーカフェを訪れた際、オーナーのノバドンさんは「ここはたいしてお金儲けからないけど、こういう場所がこの町にあるってことそのものが大切なことなんだよね」と言っていたが、僕も同感である。文化というものは往々にして個人経営の個性的なハコで開花し、そこから世界へと発信されていくことが多いのだ。

文：ロバート・ハリス／Robert Harris  
ラジオDJ、作家。現在「J-WAVE [VINTAGE GARAGE]」（毎週日曜18時〜18時54分放送）のナビゲーターを務めている。

Editor's Note

編集後記



私たちはいのちという不確かな時間の単位を持って生きている。限りのあるその時間のなかで、毎日が悲喜ごもごめまぐるしい。2020年東京五輪開催の知らせは、そんな私たちに確かな未来を約束した。  
これから7年間、私たちにとって、東京五輪は灯台のような存在になったらいいと思う。なりたい自分、こうあったらいいと思う東京をイメージしながら、ひとりひとりの心に宿ったルートを辿って、灯台へ。その過程で生まれ、感じたその集積こそが、東京文化の新しい幕開けへと結実するのではないかな。  
みなさんはどういうルートを辿って、灯台を目指しますか？ 自分の歩幅でこつこつと。選手と観客だけでは括れない。立場や役割も越えて、東京五輪はこうしてみんなの生きる場所になる。

About Tokyo Culture Creation Project

東京文化発信プロジェクトとは

東京文化発信プロジェクトは、「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けて、東京都と東京都歴史文化財団が芸術文化団体やアートNPO等と協力して実施しているプロジェクトです。都市各地での文化創造拠点の形成や子供・青少年への創造体験の機会の影響により、多くの人々が新たな文化の創造に主体的に関わる環境を整えるとともに、国際フェスティバルの開催等を通じて、新たな東京文化を創造し、世界に向けて発信していきます。

Tokyo Culture Creation Project, organized by the Tokyo Metropolitan Government and the Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture in cooperation with arts organizations and NPOs, aims to establish Tokyo as a city of global cultural creativity. The project facilitates involvement of a larger number of people in creation of new culture, by building regional bases for culture creation across the city and offering opportunities for creative experiences to children and young people. Moreover, it creates and globally disseminates new Tokyo culture through organizing international festivals and other diverse events.

www.bh-project.jp

www.bh-project.jp/en

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室

〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階 tel：03-5638-8800 | fax：03-5638-8811